

巻 頭 言

2020 年は、加古川市民病院機構が発足し 10 年目、加古川中央市民病院が開院し 5 年目の節目の年であり、また東京五輪 2020 が開かれる予定の年でした。しかし、2019 年の年末に、中国武漢で発生した新型コロナウイルス感染症は国内外に蔓延し、医療並びに経済に甚大な影響をもたらし、現在も第 5 波が全国的に勢いを見せて感染拡大に至っています。一方で、東京オリンピックは延期され無観客での開催となりましたが、日本選手の活躍に多くの勇気と感動をもらいました。ワクチン接種も供給不足という課題はありますが、高齢者への接種もほぼ終わり、若い世代への接種へと移行しています。只々、1 年半に及ぶ新型コロナウイルスとの闘いが、1 日も早く終息する事を願うばかりです。



加古川中央市民病院は 2016 年 7 月開院以来、消化器センター、心臓血管センター、こどもセンター、周産母子センター、がん集学的治療センターの 5 大センターを中心に高度専門医療を実施し、各診療科での充実した診療とその総合力で救急医療に取り組むことで高度急性期・急性期医療を担う病院として、着実に業績を積んできました。中でもがん診療においては、がん集学的治療センター（手術療法室、放射線療法室、薬物療法室、がん緩和ケア室、がん相談支援室）を中心に体制整備、診断治療の充実に取り組み、国のがん診療連携拠点病院の指定を受けることができました。また、これからの医療に重要な役割を持つ遺伝医療に対応するため、遺伝子診療部を開設したところです。新型コロナウイルス感染症の診療をおこなう一方で、小児循環器内科を開設し心臓血管センターの拡充をはじめとして、各診療科でより密度の高い診療に取り組んできました。

加古川市民病院機構学術誌第 10 号には、2020 年度の病院概要並びに職員の論文や学会発表などの研究業績が盛り込まれています。ご覧いただき忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。最後に、本誌の取り纏めにご尽力頂いた編集委員や職員の方々に深謝申し上げます。

2021 年 8 月

加古川市民病院機構 理事長
加古川中央市民病院 院長
大西 祥 男